

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<研究ノート>揺らぎ響（とよ）む大地：上代日本の共感覚

著者	坂本 勝
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	90
ページ	10-16
発行年	2014-07-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/11627

〈研究ノート〉

揺らぎ響む大地^{とよ}

——上代日本の共感覚——

豊かさへの願いがわたしたち人間共有の思いであるとして、さてその「豊かさ」とはなにかということになると、当然のことながら、その答えは簡単ではない。人により、社会により、時代により、その他さまざまな個別の要件の違いから、千差万別の考えがそこにはありうるだろう。ただ、その根底には、自然と文明のあわいを今も生きている人間に固有の、そして普遍的な生命感覚が、いわば個別要件を超えて存在しているだろうという見通しも、当然ある。たとえば上代日本語で、いわゆる「豊かさ」を意味することはを探り、その根底にある生命感覚を追ってみると、時代と社会のあり方と深く関わりつつも、ある普遍的な感じ方が流れていることもおよそ知りうる。そのことばは、たとえば〈トヨ〉（トヨム）〈ユラ〉（ユラク）〈サワ〉（サワーク）〈サヤ〉（サヤク）など、本来、擬態語のように働きつつ、その一方で、それがある〈動き〉として感受したと思われることばの諸相に、上代日本の生命感覚を露出させて、記紀

万葉などの古文獻にかなりはつきりと残っている。そのことばの用法を追っていくと、揺らぎ響む大地と共振、共鳴する上代日本の生命感覚が浮かび上がる。

一 〈トヨ〉の世界

上代語〈トヨ〉の語義用法の説明として、たとえば岩波古語辞典は「とよ〔豊〕〈トヨミ（響・動）と同根。本来、雷の音のように響きわたる音を表す擬態語。転じて、あたりに音が満ちあふれるように感じられる豊作の感動をいう語〕豊作・豊富の意。また雄大の意。」として、前者の例として「豊秋津島」「豊葦原」「豊栄昇り」、後者の例として「豊寿き寿きもとほし」をあげる。一方、〈トヨ・豊〉と〈トヨム・響・動〉のつながりに言及しない時代別国語大辞典上代編などもあり、時代別では〈トヨ〉は「形状言。ゆたかなこと。トヨ・トヨノの形で

坂本 勝

複合語を作り、ほめ詞となる」と説明され、「豊の年」「天の瑞物、地の豊草」「水底豊み」「豊秋津州」の例をあげている。また、「トヨム」については「鳴り響く。トヨは擬声語でその動詞化か。」とする。

岩波古語辞典が、音を表す擬態語を本来の意味合いとし、その転義として、豊かさ一般を意味する抽象化した用法へと展開したと把握するのにたいし、時代別が、その二つを分けている理由の一つは、たぶん、ほぼ接頭語的な用法に終止する「トヨ」の語性に音の響きを認めにくいという判断があったのではないかと思われる。そこでまず、接頭語的な「トヨ」の用法にはたして音の響きはどこまで認めうるか、という点についていくつか検討したい。

記紀の国生み神話の「豊秋津島」は、秋の実り豊かな国の意で、その中心には稲の実りにたいする願いがある。その秋津島を含めて、地上世界を「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」と称えるのは、葦茂る水辺の大地が始原の水田へと変わっていく姿を想像してのことである。生態学的にも、葦原は一定の技術を伴って稲作水田と等価交換すると指摘されている¹⁾。したがって「豊秋津島」の称え方は「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」の賛美の仕方と意味的に深くつながっているはずである。その葦茂る地上への降臨を命じた古事記の初出箇所はつぎのように記されている。

天照大御神の命以て、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らず国ぞ。」と言依さし賜ひて、天降したまひき。是に天忍穗耳命、天の浮

橋に立たして詔りたまひしく、豊葦原之千秋長五百秋之水穂国はいたくさやぎて有りなり」と告りたまひて、更に還り上りて、天照大御神に請したまひき。
(古事記)

この部分は一般に、天孫降臨以前の地上世界の混沌とした無秩序状態を比喩的に表したものと解されているが、直接的にはむしろ、葦原の「さやぎ」を言ったものである。その「さやぎ」は、

狭井川よ雲立ち渡り畝傍山木の葉さやぎぬ風吹かむとす

(記歌謡二〇)

葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹きくるなへに雁鳴きわたる

(万一〇・二一三四)

さがが葉のさやぐ霜夜に七重かる衣にませる児らが肌はも

(万二〇・四四三一)

など、風とともに揺らぎざわめく草木の音をいう。「豊秋津島」「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」は、そうした草木が風に揺れ広がる音の世界を経験的、感覚的に響かせながら、豊かな実りを寿ぐ賛美のことばであったとみるべきである。

「豊国」の地名起源として記されている豊後国風土記(総記)の「天の瑞物、地の豊草」の記述はつぎのごとくである。

景行天皇筑紫巡行の折、豊国直の祖菟名手が治国の命を受け、仲津郡中臣村に至って日が暮れた。翌朝、突然白い鳥が北から飛び集い、部下にその様子を見せたところ、鳥は餅に姿を変えた。さらにまた瞬時のうちに、「芊草数千許株」と化して、花葉ごとく栄えた。菟名手、不思議に思いかつ喜んで、「いまだかつて見たことがない。至徳の盛り、天地の瑞祥です」

と奏上した。天皇はそれを聞き喜び、「天の瑞物、地の豊草なり。汝の治むる国は、豊国と謂ふべし」と言った。

「芋草」は里芋のことで、茎を伸ばし「花葉」を一面に広げるそのようすは、〈トヨ〉による賛美がどのような感覚を背景にもつかを伝えている。また一面に繁茂する「芋草数千許株」は、飛来した数千の白鳥の化身である。群れ飛ぶ鳥は、上代ではしばしばその響きわたる鳴き声とともに捉えられた。

風に揺れ動く草木の音とは別に、宴に興じざわめく人々の声を背後に響かせる〈トヨ〉の世界があり、それはたとえばつぎの歌などに見ることができる。

この御酒は 我が御酒ならず 酒の司 常世に坐す 石立たす
少名御神の 神寿き 寿き廻し 豊寿き 寿き狂ほし
献り来し 御酒そ 残さず飲せ ささ (記歌謡三九)

太子ホムダワケ(応神)の敦賀からの帰還を祝す宴に際し、母オキナガラシヒメ(神功皇后)が「待酒」を醸んで奉った歌で、この歌に、武内宿禰が太子に変わって答えた歌がつぎの歌である。

この御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて 歌ひつつ
醸みけれかも 舞ひつつ 醸みけれかも この御酒の 御酒の
あやに転楽し (同四〇)

「神寿き寿き廻し、豊寿き寿き狂ほし」の内実は、鼓を叩き歌い舞いながらにぎやかに酒作りに勤しむことである。「狂ほし」というのは、その行為が日常の秩序を超えるものであることを表している。

あしひきの 八つ峯の上の 梅の木 いや継ぎ継ぎに 松

が根の 絶ゆることなく 青丹よし 奈良の都に 万代に
国知らさむと やすみしし 吾が天皇の 神ながら 思ほし
めして 豊の宴 見す今日の日は ものふの 八千伴の緒
の 島山に 赤る橘 うずに刺し 紐解き放けて 千年寿き
寿きとよもし ゑらゑらに 仕へ奉るを 見るが貴さ

(万二〇・四二六六、大伴家持)

新年の宴に披露すべく大伴家持が事前に作ったもので、人々が大声で笑い興じて宴の場を寿祝するさまが作者には鮮明に思い描かれている。「豊の年」を寿ぐ「豊の宴」には、こうした笑い声が響き渡ることが必要だった。それは、日常の文化の秩序を超越して荒々しい自然の野生に回歸することでもあった。宴の重要な意味のひとつはその点にある。

もちろん接頭語的な〈トヨ〉には、具体的な意味や感覚を失い、たんに美称、形状言とすべき諸例も多いが、〈トヨ〉の背後に、草木のざわめき、宴に響く熱氣にみちた音声など、音に関わるもののがかなり認められることは、やはり重視する必要がある。もちろん、〈トヨ〉が音に由来するという認識は、〈トヨム〉〈トヨモス〉などの動詞の語幹とみうることが大きい。その動詞群は、万葉集中約六十例近い用例のうち、その多くはつぎのように天然自然の音響を捉えている。

① 巻向の山辺響みて 往く水の水沫のごとし世の人吾等は

② 巨椋の入江響むなり 射目人の伏見が田居に雁渡るらし

③ 夜を長み寝の寝らえぬにあしひきの山彦とよめさ牡鹿鳴

(万七・一二六九、人麻呂歌集)

(万九・一六九九、人麻呂歌集)

くも

④

雷神のしまし動もし刺し曇り雨も降らぬか君を留めむ

(万一一・二五・一三、人麻呂歌集)

⑤

大海の海底豊み立つ浪の寄らむと思へる磯の清けさ

(万七・一二〇二)

美称「トヨ」の背後には、川の水音、鳥や鹿の鳴き声、雷鳴、浪の音など、まずはこうした大地に鳴り響くさまざまな音の世界が感じられていた。「トヨム」「トヨモス」の文字表記は万葉集総索引によると、「響」二十九例、「動」十九例、「働」一例、「豊」一例、ほかに仮名書き例が一四例ほどある。もちろん表意表記例のすべてが「トヨム」「トヨモス」と訓ずべきかどうかには問題もあり、たとえば②の原文「響奈里」は旧訓ヒビクナリを万葉集略解がトヨムナリに改訓したもので、諸注従うが、「鳴るなり」と訓むべきだとの指摘もある。ただ万葉集の「鳴る」の多くは、「トヨ」系動詞と同じく自然界に響く音を捉えている。そうした音響を意味する語を「動」で表記する例がかなりあることにも注意すべきである。

たとえば古事記に、荒ぶるスサノヲが昇天するときのようすを、「乃ち天に参上る時、山川悉に動み、国土皆震りき」と表し、それに対してアマテラスが「聞き驚」いたとある。だから「動」はまずは音響をいう。ただその「動」は「震」とともに現れているように、震動する感覚ともつながっている。それはアマテラスの秩序が崩壊し世界が荒ぶる野生に凌駕される危機を表している。

荒れすさぶスサノヲの勝ちさびによって世界がさらに深刻な

危機に立ち至ったときに、アマテラスは「見畏み」石屋戸に隠ってしまった。「畏し」は本来、自然の霊威に対する畏怖を表す。揺れ響く世界はそうした感覚に通ずる面を持っていたのである。隠口の豊泊瀬道は常滑の恐こき道そ恋ふらくはゆめ

(万一一・二五・一一、人麻呂歌集)

この歌、泊瀬川の川底には苔が生えて滑りやすい道だから心して帰ってくださいと、男を気遣ったものと解されるが、「トヨ」の呪的賛美が「恐こき」自然の霊威と繋がっている点で、古事記の例に通ずる感覚がある。また、恋の成就とは自然の野性に回歸することでもあるという禁忌の感覚を漂わせていて、万葉恋歌の本質に関わり興味深い。

スサノヲがもたらした世界の危機は、アメノウズメの「汗気伏せて踏み登り呂許志、神懸り為て、胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れ」る狂態によって、再生へと動いた。そこにも「高天の原動みて」八百万の神の「咲ひ」が響き渡っていた。古事記の「動ミ」揺らぐ世界は、このように世界の死と再生の境界に出現している。

こうした動きの感覚を持つトヨム世界は、多くの場合、視覚的な感覚を伴って表出される。「山辺響みて往く水」の音は白波を立てて泡立ち流れる映像を当然あわせもっている。雁が音鳴り響く入江には、数知れぬ雁の群れが羽を広げて広がり膨らみ飛び翔ける映像が想起されているはずである。雷神の鳴動に、空を切り裂く閃光を思い描くのは自然な経験的事実である。海の底から響いてくる波音は、揺れ動く白波と不可分であることは、その類歌に「大海の磯もと揺すり立つ波の」(万一二三九)

とあることから明らかである。鹿の声も、それが揺れ動き反響し木霊となって広がるのであり、鹿と山彦が共鳴する空間を思い描く脳裏に視覚的な感覚がまったく働いていないとはいえないだろう。このように〈トヨム〉世界は、揺れ動く感覚を生起させながら、音が広がり光が流れる共感覚的な世界として感じられていた。

二 ユラ・サワ・サヤの世界

万葉集の「響」字は、集中三六の使用例があり、上記のようにその多くが〈トヨム〉〈トヨモス〉と訓まれている。他に、ナル・ナス・トヨニが数例、「動響」二例「響動」一例はともにトドロニと訓まれている。ただつぎの例は訓読がなお定まらない。

玉響昨日の夕べ見しものを今日の朝に恋ふべきものか

(万二三九一、人麻呂歌集)

「玉響」は旧訓タマユラニを佐竹昭広がタマカギルと改訓し、従う注釈書も多い。佐竹論の根拠は、多くの言語において音(聴覚印象)と光(資格印象)を代置しうるものとして捉えており、この表記例もそうした感覚を背景にするというものであった。これにたいし、渡瀬昌忠は「響」の文字は日本でも中国でもともに音を表し光を意味する例はないとして、沢瀉久孝『萬葉小径』の訓「サヤカニモ(またはマサヤカニ)」を採るべきとし、稲岡耕二も新たな観点から渡瀬説を再評価しつつ、タマカギル以外の可能性を模索している。ただ、こうした議論の後に刊行

された阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』はタマユラニを穏やかな訓とみて、とりあえず旧訓に立ち返っている。そのユラは諸指摘するように

足玉も手玉もゆらに織る服を君が御衣に縫ひもあへむかも

(万一〇・二〇六五)

などのユラで、一般には音を立てるさまとされている。しかしこうしたユラは、三浦佑之が指摘するように、〈揺れる〉意を本来含んで成り立っており、音だけを切り出して表すものではない。揺れ動き、それとともに音が鳴るのである。その様子を日本書紀は「手玉玲瓏、織経之少女」(神代紀)と書き、「玲瓏」はモユラニ(玉の鳴る音)と訓まれている。ただ、「玲瓏」について文選李善注は「玉声」と「明貌」の二義を与えていて(渡瀬論文)、上代日本においても、玉は鳴る音とともに光輝くものであったことが推測される。玉はその揺らぐ動きとともに、音を響かせ光輝く神秘なのである。ユラを動詞化したと思われるユラクも同様に考えることができる。

初春の初子の今日の玉箒手に取るからにゆらく玉の緒

(万二〇・四四九三、大伴家持)

この歌につき、多くの注釈書は、玉飾りのついた箒を手にとると玉の緒が鳴って美しい音を立てる、のように理解している。しかし土橋寛が指摘するように、この歌は、聖武天皇から下賜された玉箒を手にとると、箒の玉が揺れ動き、それにつれて自らの「玉の緒」(生命力)も揺れ動く心地がするというように解すべきである。もちろん「ゆらく玉」には光と音がその動きとともに感じられているはずである。

枯野^{からの}を 塩^{しほ}に焼き 其^しが余^あり 琴^{こと}に作り 搔^かき弾^はくや 由良^{ゆら}
の門^との 門中^{となか}の海石^{いこう}に 振^ふれ立つ 浸漬^{なづ}の木の さやさや

(記歌謡七四)

海沿いに多くあるユラ・ユリ・ユルギなどの地名は、風や波が砂をゆり上げてできた地名とされる。時には静かに時には激しく揺れ動く大地の動きが、こうした地名には刻まれている。この歌は、その揺れ動く海に「浸漬」む木が水に「振れ」、琴の音に共鳴するように音を立て揺れ動くさまを詠んでいる。土橋寛『古代歌謡全注釈古事記篇』が言うように、それは魂が発動する姿であり、「さやさや」は音と光の感覚を霊威の発動として表したものである。渡瀬論文が「玉響」の訓としたサヤカニモ、また葦原のサヤギもその語感に通ずるものである。

トヨムと同じく、一般には音を立てる意とされるサワクもまた同様の感覚を持つ。

① ・・ 沖見れば とる浪立ち 辺見れば 白浪散動く・・

(万二・二二〇、柿本人麻呂)

② あしひきの山にも野にも御狩人さつ矢手挟み散動きてあり

(万六・九二七、山部赤人)

③ ・・ 桕繩^{たくなは}の千尋繩^{ちひろなはう}打ち延^はへ、釣りする海人^{あま}の、口大^{くちおほ}の尾翼^{おほは}

(古事記)

上代語サワクについて、内田賢徳は①の例をあげ、それは「音や光（白波）が重なり広がるさまを形容する語」であり、たんに波のざわめきを指しているのではないと指摘する。従うべき見解で、②も同じく、御狩人が山野に広がり勇壮な声が重なり響くさまを表している。その光景は吉野の自然と王権の豊かさ

を賛美する寿祝の表現である。③はつぎつぎと引き上げられる鱈の群れが、船板に重なり広がり身を盛んに動かしながら、光輝き激しくぶつかり合う音を響かせているさまで、もちろんそれは海の豊饒を意味している。

このようにトヨミ、ユラキ、サワキ、サヤグ世界は、揺れ動く大地の動態とともに感じられる音と光を共感的に捕らえた動的世界である。家持の「玉の緒」が「揺らぐ玉」に共振して発動したように、その大地自然の動的な世界は、それを生きる人々の生命の力を揺り動かす生動的な世界なのである。上代日本の《豊かさ》は、まずはこうした自然との共感共生を背景に形成された感覚なのである。

なお、今日一般に用いる《ユタカ》ということばは、万葉集ではたとえば「海原のゆたけき見つつ」(万四三六二)「白桕の手本寛けく人の寝る」(万二九六三)など、ゆつたりとして束縛のない開放感を基本とする。そこから「食物豊けく足らはす」(肥前国風土記)のように、たっぷりとした量感を表す用法を経て、今日一般の「物が豊富で満ち足りている」という意味に広がっていった。

注

(1) 西郷信綱『日本の古代語を探る』

(2) 佐竹昭広「光と音」『国語国文』第三二巻八号

(3) 渡瀬昌忠「人麻呂歌集略体歌の和訓漢語と和風義訓熟字」『万葉集研究』第十六集

(4) 稲岡耕二「玉響」「玉垣入」はタマカギルか『論集上代文学』

第二十六冊

- (5) 三浦佑之「ゆら」『古代語誌（古代語を読むⅡ）』
- (6) 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』
- (7) 内田賢徳「百合と風」『大美術』第一二二号

(さかもと まさる・本学教授)